季刊

四季

第五号

四季社

一九八五年二月二十日発行

定価 三〇〇円

現職新聞社社長のユニークな文学風土記　大阪新聞好評連載

おおさか
名作の泉

大阪新聞社長(前サンケイ新聞副社長大阪代表)
永田照海著

浪速社刊 B6判・380ページ 定価1,300円 上製本

藤沢桓夫序文……永田君に執筆を思い立たせたのは、もしかしたらふるさと大阪への彼の愛情かも知れない……

著者あとがき……私は社会部記者出身である。世の中に〝社会部長〟ほど男としてやりがいのあるポストはないといまも信じて疑わない変な男である……逆に文学作品を社会面的手法で切れば、意外に変わった展開となり、大阪文化を再認識してもらえるてだてになるのではないかと考えた……

新雪藤沢桓夫・青春の逆説織田作之助・日本アパッチ族小松左京・昨日と明日の間井上靖・蘆刈谷崎潤一郎・めし林芙美子・大阪の宿水上瀧太郎・感傷旅行田辺聖子・花のれん山崎豊子・悪名今東光・泥の河宮本輝・プールサイド小景庄野潤三・真空地帯野間宏・反橋川端康成・大塩平八郎森鴎外・晶子曼陀羅佐藤春夫・背徳のメス黒岩重吾・家族會議横光利一・大浪花諸人往来有明夏夫・井原西鶴武田麟太郎・斑鳩物語高濱虚子・十軒露地宇野浩二・ぎゃんぐぽうえっとジプシー大学生石濱恒夫・船場のぼんち石丸梧平・俄—浪華遊侠伝司馬遼太郎…四十四篇

目　次

季刊四季・第五号

ダヴインチ「女の頭部」…… 小高根太郎模写　表紙
はがき …… 堀　辰雄　表紙裏
影 …… 矢野　峰人　2
生物 …… 浅野　晃　4
誰かが僕を …… 藤沢　桓夫　6
浪淘沙（李煜）…… 松枝茂夫訳　8
根源の愛 …… 石山　直一　10
楕円の海 …… 小杉　茂樹　12
黒い奔流 …… 国友　則房　14
花と獣 …… 田中　克己　16
モネーの絵 …… 小高根太郎　19
曙 …… 江頭　彦造　20
ラーゲリ …… 大野沢緑郎　22
花咲町――早春だより …… たかはし　しげおみ　24
音楽 …… 杉山　平一　26
母の日に …… 石濱　恒夫　28
新しいページ …… 花井タヅ子　30
朔太郎と犀星 …… 高田　瑞穂　32
五右衛門 …… 福地　邦樹　34
正月の歌のこと …… 山住　正己　35
同人名簿 …… 38
同人略歴 …… 39
同人規定・会員規定 …… 40

彦根市池洲町　縣立短期大学内
田中克己様

あけましておめでたうございます

いつも御無沙汰ばかり致しておりましてお許下さいませ　皆様おすこやかに良いお年をお迎え遊ばされましたこととお喜び致しております　お正月はお賑でございませう　私共はとても淋しいお正月で相棒はお床の中でございますから　私は話相手も遊び相手もなく静か過ぎていけません

主人がよろしく申しております

奥さま始めお子様方によろしくお傳へ下さいませ

いつも〝くれない〟を有難う存じます

昭和二十六年一月一日

軽井沢町追分　堀　辰雄
多　恵

『くれない』は大阪発行の歌の雑誌。わたしはそこに「大和通信」を四回、堀辰雄氏にと注して書いた。(田中)

影

矢野峰人

なおぢそ「影」を
「影」見るは　いましのみかは

ゆふぐれの　野をさまよへる
おとなしき羊のむれも
こころなきうす雪の上に
かすかなる影を踏みては
徐々としてうなだれがちに
その暗き檻に　むかふを

また水の畔に立ちて
ひもすがら影を見つむる
うごかざる草木を見よ

ものみなは影を背負ひて
ひとりなる路を行くなり

なおぢそ影を

『幻塵集』より

生物

浅野　晃

雪のしたで
冬ごもっている
動物のように
植物のように
眼をあいて見ている
耳をあいて聞いている

感じている
思い出している　考えている
いろいろのことを　そして
じっと春を待っている
待っているのではない
いつのまにか自分も
みんなといっしょに
春になってゆくのだ

誰かが僕を

藤沢桓夫

どこかで
誰かが僕を呼んでいる
それを感じる

子供の頃からそうだった
鬢髪とみに白きを加えた今も

やっぱり呼んでいる
誰かが
どこかで

ああ
空の色だけが
抜けるように青い

浪淘沙

李煜（松枝茂夫訳）

李煜（九三七～九七八）、字は重光。唐末五代、南唐の最後の天子。一般に「李後主」と呼ばれる。九七五年、南唐は宋に滅ぼされ、李煜は捕われて宋の首都汴京（今の河南省開封市）に送られ、その地で死んだ。浪淘沙は詞の曲名。

簾外雨潺潺、
春意闌珊。
羅衾不耐五更寒。
夢裏不知身是客、
一晌貪歓。

簾外に雨は潺潺たり、
春意　闌珊たり。
羅衾は耐えず五更の寒きに、
夢の裏に身は是れ客なるを知らず、
一晌　歓びを貪りぬ。

獨自莫憑欄、
無限江山、
別時容易見時難。
流水落花春去也、
天上人間。

独自　莫に欄に憑れば、
限り無き江山、
別れる時は容易く　見う時は難し。
流水　落花　春去りぬ、
天上と人間と。

すだれの外はしとしとと雨の音、春もすでにたけたけはいである。うすぎぬの衾では夜明け方の寒さがこたえる。夢の中では、捕われの身を忘れて、しばし甘睡を貪っていた。たそがれどき、ひとり欄干によれば、遥かなわが故国よ。あっけない別れであった、また会えるのはいつの日か。花は散り水は流れて、春は過ぎゆく、天と地の距たりほども遠いかなたへ。

〈莫憑欄〉「欄に憑ること莫かれ」とも読める。憑ってはいけないと自ら制する気持と、しかしそうせずにはいられないという気持と、二つの矛盾した心情を示めす。〈江山〉国土の意。天子として支配していた江南の天下をいう。

根源の愛

石山直一

世界と人生の根源にあるものが
非情の物の力ではなくて
人格的な愛の働きであることは
なんと嬉しいことだろう

その愛の働きがなければ
物の力の跳梁するこの世界で
人間性は窒息し
終には物に化してしまう

ありがたいことに
根源の愛が
歴史の一点で歴史を破り
その働きをひとりの人間に具体化された

イエスキリスト

この一点を凝視し
そのかたの真実を身に受けて
物の力のひしめきあう暗い世界を
あかるい希望を抱いて突き切って行こう

楕円の海

小杉茂樹

錫(すず)をひいた
つよい光線のひかりと
そうでないだいだい色の
光を放つ光線と
無言で
夜の海を　つなぐ

線路で振るランプ
遠くで
大きく答えてまわすシグナルランプと
やみの中のレールをてらし出すように

岬の燈台が合図している

黒い奔流

国友則房

鉄骨の車輌は　ゆれ、
血染めの　窓硝子に
どす黒い　人肉の奔流を
塞き止める　術もない。

朝のラッシュをよそに
梅が丘の　公園で
ひとり　佇んでいる男がいる。
冬の日射しが　いっぱい……

コップの中の　嵐だが、
内と外　静と動との
無気味な　コントラストに
世間の不安は　つのる。

朱い實を　落した
柿の老木が　寒天に
死の舞踏を　奏でる。
〃フテイノヤカラヲ　キリコロセ〃

フテイノヤカラ……戦後の混乱期に、吉田ワンマン首相が労組の幹部を指した捨科白として知られている。

花と獣

田中克己

1

福寿草よりは
温室咲のアネモネの方が好きである
熱海や箱根はゆきたくないが
アテネやシラクサには行きたい
この気持が止まないので
ロマン派と自称している。

2

むかし正月も南太平洋で戦争があり
コアラの絵本が売られていた
いらない記憶（次男の棺に入れた）。
コアラは動物学的には何科だろう
博学ぶりのわたしは知らないので
字引を引いたらユビムスビ科とあった
そこでいよいよわからなくなった。

3

わたしたちの金婚の年が明けた
妻は十九歳、わたしは二十六歳で

家主の奥さんは「お嬢さん」と呼んで
あとであやまった
この家への初の訪問者は
ホジキンソン氏病で亡くなった松本善海で
家内は裏の松林の落葉で飯をたいてもてなした
いま子供たちはみな片ずいて
家内はわたしを末っ子のように世話している
わたしが呼ぶとおやつの茶が出
ついで甘い物が来る。
その家に鶯が来なくなってから久しい。

モネーの絵

小高根　太郎

真紅のひなげしの咲き乱れた緑の丘に、
明るい五月の日光がさんさんと降りそそぐ。
坂道の尽きるあたり、若葉のきらめく樫の老木、
その木蔭に白亜の館がほの見える。
透きとおった青空に、とろけるほど淡い雲が流れる、
神さまのひげのように。
うっとりと目をつぶったまま芝草に腹ばって、
生きている暖かさを泌々と身に感じる。
ふと聴耳を立てる。遠くで楽しげな女たちの声。
ものうくうす目を開いて見ると、
白いパラソルをかざした中年の女と十二三の娘が丘の上に登って行く。
ああ世界はこんなにも平和だ、こんなにも美しい。

曙

江頭彦造

静脈
透(すいと)のように

コモ湖の　白鳥の
　　悲しみ
夢　杳(はる)か

投げだされた　四肢

messの　林
　閃めき
……

曙(あけぼの)は　しらじらと
広窓に

　病後の　白内障に
かすみ……

ラーゲリ

大野沢　緑　郎

慟哭する力もない
かちんかちんに硬直した
つい昨日までの無邪気な
奴(やつ)の想い出やはかない望みは
どこまで拡がっていたのか
それよりただかじかんで煉瓦までが
黒パンにみえて
コンクリートの床じかに一枚の軍隊毛布で
気がつくと朝隣りはもう動かない
どっちを頭にしたにしてもみんな
とおい遥かな東に飛んでたことだけはたしかだ

せめて虱だらけのシューバがかけられてあったあとに
冷凍魚みたいに積みあげた馬橇から
夜半雑木林の穴に蹴こまれ
襦袢袴下のまま剝ぎ取る権利が
強盗どもの論理のどこにある
あったのは零下四〇度凍結の冷笑だけだ
掻き集められるだけかき集め
高粱がゆもない曠野に駆りたてて
ひげのカリスマがあざ笑っている
いたるところの死霊の漂泊する
重く低く凍える空が
ぶざまな裁判にかけられている祖国(くに)に
つながったままうごかない

花咲町―早春だより

たかはし　しげおみ

あれはリス？　じゃない
野兎の仔だ
キラキラ　雪と見まがう霜の上に
うずくまっているラビット

手のひらにのる仔猫ほどの
ピーター・ラビット

おや　雪だまりのかげにも！
生まれたのは二羽なのかな？

ここ花咲町　この字形四階建て
アパートの中庭に風はない
屋根より高いヒッコリの木がならび

エサらしいものはなんにもないが
大丈夫かな？　ふたごのラビット
グッドラック！　ピーター　アンド　メアリイ

音楽

杉山平一

電車は
からだをのせる

音楽は
こころをのせる

「夕日に赤い帆」にのって
きょうもあなたのもとへ
行く

母の日に

石濱恒夫

毒だみやおおばこや
すもうとり草たんぽぽにまじって
ことしもあちこちに芽をだした
白いうぶ毛におおわれたふうな
肉厚なやわらかなみどり

やがてかれんな黄いろな花が咲く
床の間にはいまも母の持仏だった
白磁のマリア観音ひとつ
たぶんこの部屋で
六十年まえわたしは生まれたのだ
なぜそう呼ぶのかは知らない
ことしも庭前の雑草にまじって
母子草が咲く

新しいページ

花井タヅ子

お陽さまは
一日がかりで
大きなノートの
頁(ページ)を
めくって下さる
コンピューターのように
地球の出来事を

そこに書き込んで
逝った人
来た人
よろこび
悲しみ
また
新しい年の
ページがめくられる
このままに
平和であるようにと
人々は祈りながら。

朔太郎と犀星

高田瑞穂

「世には二種属の人間がある。一方の種属の者は、いつもムダな死金を使ひ、時間を空費し、無益に精力を消耗して、人生を虚妄の悔恨に終ってしまふ。彼等は『人生の浪費者』である。反対に他の者は、物質上にも精神上にも、巧みにそれの最高能率を利用して、人生を最も有意義に處生する。彼等は『人生の所得者』である。ところでこの前者の範疇は僕であり、後者の典型は室生犀星である。（略）」

これは、昭和十一年六月の『文芸』誌上に掲げられた朔太郎の「所得人・室生犀星」の冒頭の一節である。この一文の結論は次の如くであった。

「室生犀星は、単に経済と時間の上で、人生をエコノミカルに生活して居るばかりでなく、藝術上の仕事の上でも、自己の天與された全財産の才能を、最も能率的にあます所なく、百パーセント以上にさへも利用して居る。」

この一文の発表された昭和十一年において、朔太郎は数え年五十一歳、犀星は四十八歳であつた。

朔太郎対犀星、浪費者対所得者という主題は、日本近代詩史における最も興味あるものの一つである。その間に大きな共鳴部と、小さなしかし決定的な不協和部とを併せ持ったこの二人の詩人は、さまざまな曲折を経つつ、遂に終生の親友であった。朔太郎は、昭和十七年、五十七歳で没し、犀星は、昭和三十七年、七十四歳で没した。この二詩人を考えるとき、特に重視すべきは、言うまでもなく両者間の不協和部である。その点をくわしく告げたものが、朔太郎の『新しき欲情』である。大正十一年四月に刊行された二百五十五章から成るこの書から、第二章「新しき欲情」と第二十五章「どこに美が見出される？」との一節を引く。

「人々は新しい欲情を求めて居る。かつて何物かが、そこに有るべくして有ることのなかつたやうな、さういふ新しい欲情にかわいている。（「新しき欲情」）」

「要は諸君の實生活を捨てよ。實生活に於ける一切の功利的感情を忘失せよ。」（「どこに美が見出される？」）

朔太郎は、プラトンに学び、ニイチェに聞き、殊にショウペンハウエルに接して「新しき欲情」に思いをこめたのであった。『青猫』（大正一二・一刊）の詩的世界がそこから展開した。何人にとっても、殊に詩人においては、生の山頂は際立った存在であった。そういう山頂を過ぎたものは、下降を余儀なくされずにはいない。大正末年から、朔太郎の創造力は際立った後退を示した。そういう下降の果てに、詩人朔太郎の当面したものが、「日本への回帰」の問題だったのである。

五右衛門

福地邦樹

わが家の牝猫の名はゴエモンである。娘がマンガからつけた名前であるが、仔猫のとき頭の毛がピンピン立っていたので、五右衛門のイメージがあった。八ケ月で不妊手術をして、今一歳半。名前に反して喧嘩に弱くて、やさしい性格である。鰹まぶしのごはんとダシジャコが好きで、キャッツフードは殆ど食べない。アンコが好きで、味付のりが大好物である。たえず出歩くが、戸締りをする頃に闇に向かって二三度声高く呼ぶと大抵かえってくる。そして一ねいりしてまた真夜中に戸をカリカリさせて出せといい、夜明け方またカリカリと帰ってくる。

犬を飼うより猫を飼う人の方が動物好きだというけれど、たしかに猫は気儘勝手で、それが好もしくなければならぬ。運動不足の雨の夜など燃えてきて、毛を逆立てて家中を走りまわる。

忙がしい生活の中で、ゴエモンを膝においている時間は、音楽をきくときのように穏やかな空白の時なのである。

正月の歌のこと

『万葉集』巻末の歌から子どもの替歌まで——

山住正己

正月の歌について書こうとすると、およそ趣旨のちがう歌がつぎつぎに浮かんでくるので、正月とは何かと考えこんでしまう。

『万葉集』全巻の終りの歌は、大伴家持の、

新(あたら)しき年の始の初春の今日降る雪のいや重(し)け吉事(よごと)

であった。美しい余韻をのこして全巻をとじた編者の力量にはほとほと敬服する他ないが、家持が国守として赴任した因幡の国で雪の中、どんな新年の宴を開いたのか、これは想像もつかない。江戸時代、与謝蕪村の、

いざや寝ん元日はまたあすのこと

になると、ずいぶん身近になってくる。大晦日の夜、たくさんの人がNHKテレビで紅白歌合戦その他を視聴し、あるいはベートーヴェンの第九交響曲を聴き、十二時近くなるとテレビのあちこちの番組で

除夜の鐘を聞く。さらに、こたつをかこんであれこれ喋っているうちに時間はすぎてゆく。ずいぶん遅くなってから、「いざや寝ん」という気持になるのが、平均的な現代日本人ではないだろうか。この人たちは「あす」については、青木月斗の

元日や暗き空より風が吹く

といった日ではなく、やはり快晴無風であってほしいと願うだろう。

しかし、正月の歌というと、正月を楽しみに待っていた子どものころに覚えた歌が、実はまっ先に浮かんでくる。

年の始めの　例とて／終なき世の　めでたさを

に始まる「一月一日」（千家尊福詞・上真行曲）は、一八九三年、文部省が「君が代」や「紀元節」（「（雲にそびゆる高千穂の／高根おろしに／草も木も……」）などとともに「祝日大祭日唱歌」の一つとして官報に告示した歌である。その三年前の教育勅語発布とともに、祝祭日に学校で儀式が行なわれるようになり、その儀式用の唱歌がここで八曲制定され、以後一九四五年八月十五日まで毎年うたわれたのである。

この歌より先に知ったのは、

もういくつねると　お正月／お正月には　凧あげて／こまをまわして　遊びましょう

という、ほとんどすべての日本人が知っている「お正月」（東くめ詞・滝廉太郎曲）である。これは東

と滝が協力してつくった『幼稚園唱歌』（一九〇一年刊）に、「鳩ぽっぽ」（「鳩ぽっぽ　鳩ぽっぽ／ポッポ〳〵と飛んで来い……」）などとともに掲載された歌で、従来の文語体の唱歌とちがう言文一致体であり、子どもたちに長く親しまれてきた歌の一つといえる。

これらの歌を幼稚園や学校で教わったのだが、もう一度「実は」をくり返すと、実は私たち（というのは私の小学校の同級生だが）これらの歌は教室の外では、たいていつぎのような替歌でうたうことの方が多かったのだ。「一月一日」は、

年の始めの肥かつぎ（あるいは「豆腐の始めは豆である」）　尾張名古屋の大地震（あるいは「金の鯱」）　松竹ひっくり返して大騒ぎ　あとの始末は誰がする（あるいは「祝う今日こそ叱られる」）

であり、「お正月」は、

もういくつ寝るとお正月　お正月には餅食って　腹をこわして死んじゃった　早く来い来い霊柩車

であった。こういう替歌は民謡同様、誰がつくったかわからぬし、こういう歌は活字としては遺されていないと思っていたところ、小島美子・河内紀『日本童謡集』（一九八〇年、音楽之友社）に、「汽車」「湖畔の宿」「月月火水木金金」など替歌とともに掲載されており、嬉しくなった。こういう歌を口ずさむと、子どものころの思い出にひたりたくなる。

最後に年の変わり目を詠んで、もっとも迫力があるとかねがね思いつづけてきた句をあげておきたい。

去年今年貫く棒の如きもの　高浜虚子

同人名簿

（順不同
＊は名誉同人）

＊植村清二	176	練馬区桜台6－8－5
岩崎昭弥	502	岐阜市近島232
＊石山直一	559	大阪市住之江区住之江1－3－10
＊牛尾三千夫	699-42	島根県邑智郡桜江町市山474
＊小高根太郎	156	世田谷区桜1－63－6
高橋しげおみ	632	天理市三島町100
福地邦樹	578	東大阪市新庄241－17
江頭彦造	167	杉並区下井草2－16－12
川村欽吾	036	弘前市豊原2－3－35
＊小杉茂樹	421-05	静岡県相良町波津762－2
伊達温	565	吹田市尺谷24－5
＊野田又夫	602	京都市左京区松ケ崎三反町5
坂口允男	630	奈良市高畑大道町1232
金井寅之助	670	姫路市野里慶雲寺前町707
石濱恒夫	558	大阪市住吉区墨江2－5－6
＊松枝茂夫	167	杉並区本天沼2－37－21
山住正己	166	杉並区阿佐谷南1－38－2
＊藤沢桓夫	558	大阪市住吉区上住吉2－12－4
＊高田瑞穂	157	世田谷区成城2－4－20
田井中弘	520-03	大津市伊香立下在地町914
＊矢野峰人	158	世田谷区深沢2－14－17
＊浅野晃	151	渋谷区本町3－32－1－1004
田中克己	166	杉並区阿佐谷南1－40－8
＊河村純一	522	彦根市中央町7－5
高橋渡	158	世田谷区奥沢1－63－5
花井たづ子	176	練馬区旭丘2－36
大東幸子	574	大東市諸福3－6－10
大野沢緑郎	235	横浜市磯子区上中里町1028－3－311
藤野一雄	522	彦根市本町1－8－27
森亮	572	寝屋川市木屋町10－18
国友則房	184	小金井市本町3－1－20

同人略歴（2）

矢野峰人

本名　禾積（かずみ）

明治26年　3月11日岡山県（美作）久米郡神代に生まる。
大正7年　津山中学、三高を経て京大英文学科卒業。
大正15年　三高教授在職中、台北高等学校教授に転任、台北帝国大学創立準備委員として英国に派遣された。
昭和3年　3月帰国、新設台北帝国大学教授となる。
昭和20年　台湾大学大学院教授として留用さる。
昭和22年　京都に帰還、同志社大学教授となる。
昭和26年　東京都立大学に転任。
昭和32年　学長となり、任期満了後退職、同学名誉教授となる。

□著作目録（―詩歌中心）

詩集
黙禱　大正8年　東京　水甍社刊
幻塵集　昭和15年　台北　日孝山房刊
影　昭和18年　仝　仝
（昭和45年東京　大雅房再刊）
挽歌　昭和30年　東京　長谷川書房刊
（32年前者より亡児に関する作のみを抜ける一連）

訳詩集
シモンズ選集　大正9年　東京アルス刊
しるえっと　昭和8年　台北　日孝山房刊
黒き猟人　昭和18年　仝　仝
（オーマーカイヤム「ルバイヤット」）現

論考
世経　乾坤2冊帙入　東京　大雅洞刊
詩学新考　大正15年　東京　第一書房刊
詩学入門　昭和24年　大阪　堀書店刊
鉄幹・晶子とその時代　昭和48年　東京　吾妻書房刊
蒲原有明研究（新訂版）昭和59年　日本図書センター刊

藤沢桓夫

明治37年7月12日大阪船場の備後町で生れた。道仁小学校・旧制今宮中学校を出て、大正11年北畠に創立されたばかりの旧制大阪高校文科甲類に入学。同級の神崎清・小野勇・崎山正毅らと同人雑誌「龍舫」「傾斜市街」ついで「辻馬車」を難波の波屋書房より刊行。同誌に発表した「首」その他の作品を横光利一・川端康成・片岡鉄兵らの新進作家に認められる幸運に浴し、彼ら若き先輩たちの推挽により早く文壇に出、東大一年の時に「新潮」「文芸春秋」に作品を発表。胸疾のため二十歳代の後半を信州富士見のサナトリアムで暮らしつつ、三十歳以後は郷里大阪に定住、以来半世紀以上の作家生活をつづけて今日に到る。新聞・雑誌に連載の長篇の仕事多く、著書に「燃える石」「新雪」「大阪五人娘」「泉は涸れず」「将棋水滸伝」「大阪自叙伝」「人生座談」その他二〇〇冊ほどあり。趣味の第一は将棋で、日本将棋連盟より六段を贈られた。

美しさへのマイウェイ

双美人

明治36年
双美人マークのクラブ化粧品が
創業いたしました。
以来、80年にわたり
皆さまに愛されてきた
クラブ化粧品が
動植物エキスを配合して
つくりあげたフルベール。
今、双美人マークは
フルベール化粧品の
シンボルマークです。

フルベール化粧品®
本社 大阪市西区西本町2-6-11
〒550 電話(06)543-0077

同人規定

1．同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び、毎号のせることとする。
1．老大家＊以外は同人費として投稿毎に2,500円（送料共）を納めること。
1．なるべく常用漢字、常用かなづかいを用いること。（短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする）
1．当雑誌を各方面に広く配布してもらい、売却金を刊行元に送金してもらいたい。（郵便振替　東京8-132924四季社・送料引）
1．同人に適当な人があれば紹介してほしい。

会員規定

○ 会員は男女職業年齢を問わない。
旧『四季』を閲覧し、堀辰雄氏を愛した経験のあるものに限る。
○ なるべく常用漢字、常用かなづかいを用い、創作であること。
（2ページ分が望ましい）
○ 会員費として4ケ月分2,000円（送料200円）を、振替　東京8－132924　四季社まで納入してほしい。
○ 同好者を誘ってもらいたい。
○ 詩を送ってもらいたい。(締切　　月末日)

季刊　四　季　第五号　定価300円（送料200円）

発行　四季社
〒166　東京都杉並区阿佐谷南1－40－8　田中克己方
電話　03－314－2783
印刷　有限会社　カルチェ・プロ
〒532　大阪市淀川区西宮原1－6－60　電話06－391－3133㈹